

生徒の思考力・自己表現力を高める中学校英語科 スピーキングタスクの考案

学籍番号 199351

氏名 三浦 良太
主指導教員 橋本 健一

1. 実践研究の背景

近年、直接会わずにコミュニケーションを取る機会が急激に増加している。だからと言って顔を合わせてコミュニケーションを取る機会がなくなることは確実でないし、そう言い切れる程度にコミュニケーションと我々人間の暮らしは密接に関係している。また人間はたった一人で社会を生き抜いていくことはできず、誰かと助け合いながら生きていくことが必要である。その際に、他者の話に耳を傾けて理解しようとする、自分の伝えたいことを相手に伝えられること、自分から進んで人と関わることなど、主体的にコミュニケーションを取ることが必要となる。

このような社会情勢は学校英語教育にも影響を与えている。中学校外国語科では、2021年から全面実施になる新学習指導要領で4技能5領域となり、スピーキングの領域が話すこと（やりとり）と話すこと（発表）に分けられる。このことは、母語だけでなく外国語を用いて自分を表現し、コミュニケーションをとっていく必要性が強まったということを反映している。実際、グローバル化が急速に進展する中で、外国語を用いたコミュニケーション能力は、生涯にわたる様々な場面で必要とされている。

このような背景に基づき本教育実践研究の目的は、中学校英語科でこのような負荷を少しでも取り除き、生徒の自己表現力・思考力を高めるためのスピーキングタスクを考案することである。

2. 実践研究

2.1 基本学校実習Ⅰ・Ⅱ

基本学校実習Ⅰでは、指導教諭の授業内活動で行われていた生徒たちによる発表の部分を担当した。自分たちが作ったゆるキャラを生徒たちが人称代名詞（He/She）を活用して説明文を考え、発表するというものであった。生徒が発表の聞き手となったときに、どのような工夫があれば内容に注目して聞くことができるかを指導した。

基本学校実習Ⅱでは、生徒の抱えている課題を具体的に知るために、グループによる対話活動をレコーディングし、分析を行った。その結果、発話面（流暢性）において基本学校実習Ⅰの授業見学で感じた英語を話すことへの意欲は変わらず高いものの、グループによって日本語の使用量がとても多い等の差があることがわかった。また文法面（正確性）においては三人称単数現在sの付け忘れ、人称代名詞の欠落や間違い、be動詞の欠落などが目立っていた。

これらの結果より、発話の充実を図るために双六を用いて疑問文をたくさん使わせる実践を行った。この実践では、Yes/No 疑問文と疑問詞を使った疑問文の両方に焦点を当てて行な

った。その結果、生徒は双六というゲーム性のお陰から積極的に活動に取り組み、特に疑問詞を使った疑問文の産出が多くみられた。また、人称代名詞 (He/She) をターゲットとして、人物に名前を付けてその人物の特徴を即興で考え相手に伝えて当ててもらおうという活動も行った。この授業実践では、グループで協力してどんな特徴が説明で使えそうか、どのように言えばいいかなど思考・相談しながら活動に取り組む姿を見ることができた。

2.2 発展課題実習 I

発展課題実習 I では、コロナウィルスの影響で休校になった分の授業時間確保のため、授業実践は行うことはできなかった。1年目で信頼関係が気づけた生徒たちともしばらく会えずにいたため、基本学校実習で具体化した生徒の課題を授業見学と授業補助を活用して、再度検討することとした。その結果、生徒が発話活動を行う際、会話の返答が文ではなく単語レベルで行われていることを新たに発見することができた。

2.3 発展課題実習 II

発展課題実習 II では、上記の課題に対応するために不定詞を目標文法事項に置き、ホストファミリーと日本人生徒に分かれて調理器具や食材を調達してお好み焼きを作るタスクを行った。この実践では、最終的にグループで一枚お好み焼きを作る。その条件として、全員が食べるのでできるものを作るというルールを設けた。そうすることで、この食材は A さんが嫌いだから入れないでおこうなどの工夫をする際に思考・会話が促進されたと考えた。結果的に、タスクが複雑であったため説明に時間がかかってしまい、想定する結果を得ることはできなかった。

次に、Yes/No 疑問文を使ってたくさん質問を行い、自分の欲しい情報を入手できるように生徒一人一問クイズを作り、グループでクイズ大会を行った。第二学年を対象にしたこの実践では、第一学年で既習の疑問文についてあえてもう一度、丁寧に作り方について説明を行うことで、タスクでは積極的に疑問文を活用して、情報を引き出し、答えに迫ることができていた。

3. 総合考察

以上の実践から結論は3点にまとめられる。1点目は説明の大切さ、つまり活動前の文法事項の明示的説明である。既習事項をあえて丁寧に説明することは、時間的制約がある中ではあまり現実的ではない。しかし、活動前に丁寧に説明を加えることにより理解がしやすく、後の活動にスムーズに入っていける。2点目は活動を最大限シンプルにすることである。活動で教師がやりたいことを詰め込んでしまうと過度に複雑になってしまい、説明する時間が長くなったり、活動自体が破綻してしまう。そうならないために、生徒を想像して活動を考えていくことが大切である。3点目はタスクにゲーム性を持たせることである。ただ単に作業的に英語を使用させるのではなく、実際の状況を生徒に想像させ、この文法は実際にこういう場面で使えるのかと気付かせることで、より英語学習に取り組む意識が高くなる。また、活動においてすごろくやクイズなど、生徒がやったことのあるものを活用すると、生徒も楽しんで英語を学習することができる。